

第5学年 社会科の実践

1 単元名 未来を支える食料生産「米づくりのさかんな地域」(全14時間 本時11時間)

2 単元目標

- ・我が国の稲作が自然条件を活かして営まれていることや、その生産にかかわること人々の工夫や努力によって支えられていることを理會するとともに、地図帳や統計などの各種の基礎的資料を通して情報を適切に調べまとめる技術を身に付けるようにする。
- ・稲作にかかわる人々の働きを多角的に考える力、稲作に関わる課題を把握して、これからの稲作の発展について考える力、考えたことを説明する力を養う。
- ・我が国の稲作について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して我が国の産業の発展を願い、我が国の将来を担う国民として自覚を養う。

3 「ひびき合う三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題「子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成」
手立て・・・子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり
高学年ブロックテーマ「仲間への理解、自立する自分」
・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿
・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

〈聴く・話すについての指導〉

「聴く」については、教師の発問や友だちの考えに対して目と耳と心で聴く、話す人を見て最後まで聴く、というルールに加え、聴いたことに対する様々な反応を認め、自分の考えと比べて感じたことを素直に表現できるような雰囲気大切にしてきた。友だちの考えに対する「うなづき」や「つぶやき」を取り上げ、褒めていくことで、反応できる子どもが少し増えてきた。まだ反応が薄い場面もあるが、その時には教師から「どう思う？」と全体に改めて問いかけるようにしている。

「話す」については、考える時間を十分確保し、まずは自分なりの考えをもつことの大切さを伝えている。そして、話題に沿って自分の出番を考え、発言や質問をすることができるよう、取り組んでいる最中である。また話し手として、どの言葉を使えばよいのか、どのように順序立てて相手に伝えればよいのか考えながら話ができるように、指導を重ねている。

今までのコロナ禍で、対面での活動が難しい中でのスタートであった。話し合い活動では、十分に耳を傾けて聴いたり、マスクをしたまま相手に伝わるように話したりすることを意識できるようにしてきた。徐々に対面での学習が可能となり、学校生活の様々な場面で、「聴く・話す」を意識した活動を取り入れられるようになってきた。ペアトークやグループトーク、学級での話し合い、教師や児童が指名せずに自らどんどん発言していくなど、必要に応じて表現する場も工夫している。相手意識をもった「聴く・話す」活動にしていく中で、聴くことのよさを味わうとともに、自分の話を聴いてもらえる心地よさを実感できるようにしていきたい。

〈これまでの関わり合い・ひびき合い〉

これまで、学習に限らず様々な話し合いをする場面をつくってきた。聴き手も話し手も相手意識をもった話し合いができるような声かけをし、常に自分の考えと比べながら話し合いに参加することの大切さも伝えている。少しずつではあるが、思いつきで発言するのではなく、友だちの考えや話題に沿って話し合いに臨む姿が見られるようになってきている。また、ちょっとした児童のつぶやきや、自分から発言することに消極的な児童の考えを教師が拾い上げることで、学級全体の考えがもとになってひびき合っているよう、意識して取り組んでいる。

代表委員会の議題、クラスイベントや総合的な学習の時間の活動内容などについては、活発な話し合いになることが多い。自分の生活に関係する事柄や興味がある話題に対しては、進んで話し合い、相手の話を聴き自分の考えを深めることができる。意欲的に関わり合える問題を学習場面で設定することにより、話し合ったことが自分の思いを強めたり、考えを深めたりするひびき合いの姿をめざしたい。

4 単元と指導について

〈単元について〉

本単元では、資料や農家の方の話をもとに、米作りに適している自然環境や生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目して、食糧生産にかかわる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現することを通して日本の食糧生産を支えていることを理解できるようにしていく。また、日本の農業の様子や発展について主体的に学習問題を追究・解決し、これからの食糧生産について自分なりに考えようとする態度を養う。

学習内容は、新潟県魚沼産のお米作りと小田原市のお米作りを比較しながら進めていく。地図やグラフ、農家の方に直接手お話を聞くことで、それぞれの気候や環境を生かした稲作や、米作りの努力や工夫、おいしいお米を多くの方に食べてほしいという強い思いを理解できるようにしていく。また、米の生産量や農業従事者の減少など、現代の農業の抱える悩みや課題についても学び、困難に「直面しても農業を続けようとする農家の人々の工夫や努力、これからの農業の発展について考えていきたい。

〈指導について〉

「新潟県魚沼産コシヒカリ」と「小田原産はるみ」を食べ比べる。それぞれのお米の味や食感、見た目、おいしさを比べながら食べることで2つのお米の大きな違いに気付く。違いがなぜ生まれるのか、子どもたちは「作り方」「作っている場所や環境」「作っている人」の3つが要因だと予想し、この3つについて「新潟県魚沼産コシヒカリ」と「小田原産はるみ」を比べながら調べていく。

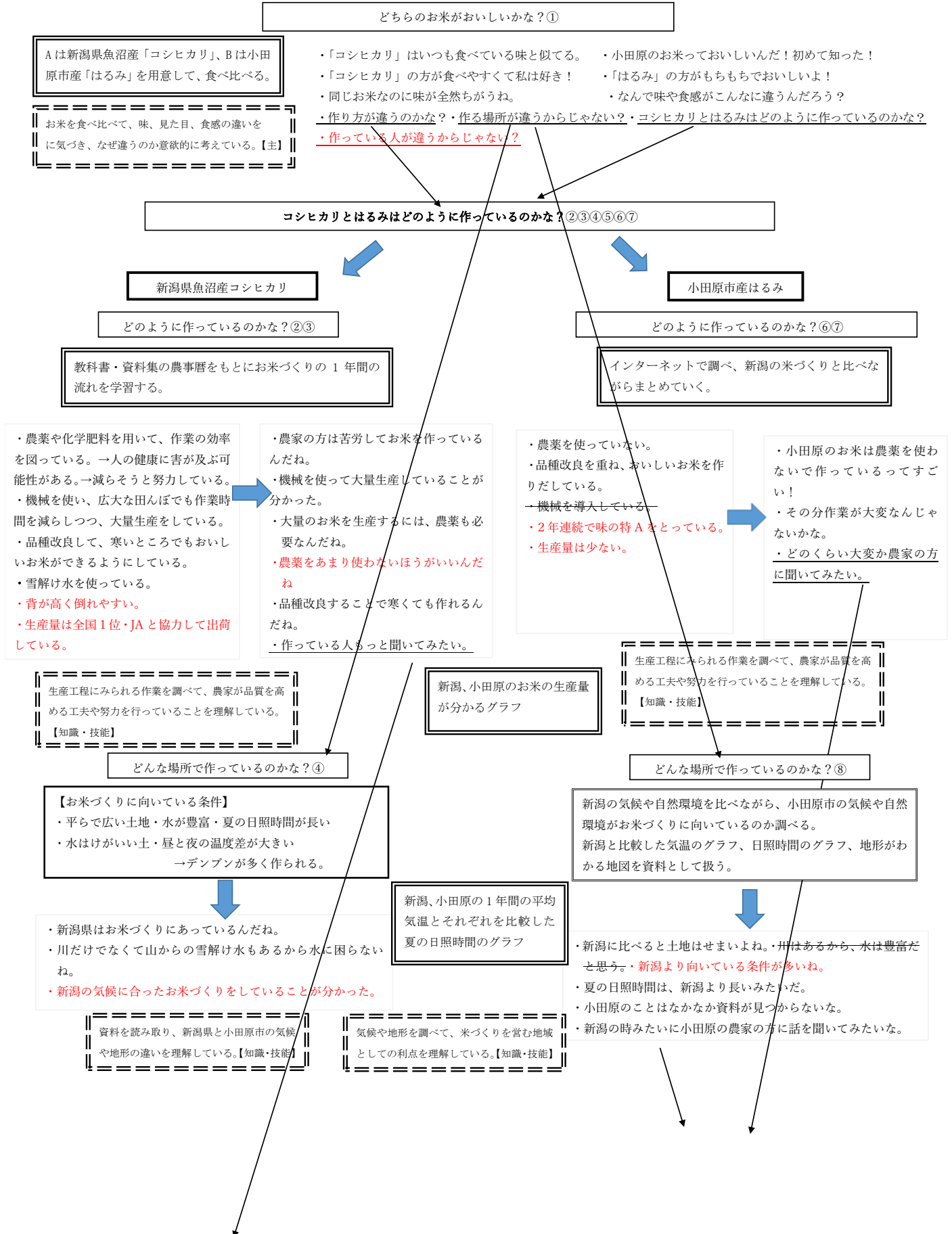
「新潟県魚沼産コシヒカリ」を調べていくと、大きな特徴として広い土地があり、機械を導入して大量のお米を生産していること、米作りにあった自然条件を生かし、おいしいお米を作っていること、広い土地であること、そのために農薬や化学肥料を使って病気、害虫、雑草からお米を守り、養分が全体にいきわたるようにしていることが挙げられる。一方「小田原産はるみ」では、新潟のように広い土地はないが、無農薬でお米を生産しているという大きな特徴が挙げられる。また、2つのお米の共有していることについては、品種改良をすることで、その土地の気候に合ったお米を作っていることに子どもたちが気付くと考えられる。

子どもたちの「農家の方に詳しいことを聞きたい」という反応が予想される。そこで「新潟県魚沼産コシヒカリ」の生産者である細金さんと「小田原産はるみ」の生産者志村さん、それぞれに話を聞く機会を設け、米作りにこだわっていることや大変なこと、米作りの課題などを子どもたちに伝えていただく。そこで、生産者の米作りに対する情熱を理解することができると考える。児童は米作りの工夫や努力、後継者不足の共通点に反応すると考えられる。また、「小田原産はるみ」の生産者志村さんの無農薬、化学肥料を使わない大変さを知り、「大変なのに無農薬を続けてすごい」「どうして小田原で米を作っているんだろう」「農薬を使えばいいのに」「どうし

て無農薬で米作りを続けているのだろう」といった反応が出てくると思われる。そこで本時ではその児童の考えや疑問を大切にし、解決したい問題を「志村さんは、どうして無農薬でお米を作っているのかな」とした。これまで学習してきた無農薬のよさや、志村さんのお米づくりに対する思いを踏まえながら予想していく。無農薬であると手間がかかるため、お米の値段が高いことを理解した上で生産者や消費者の目線で多角的な視点からなぜ無農薬でお米を作り続けているのかについて、考えをもち、話し合いを通して多角的に自分の考えを深めたり、明確にしたりする姿をひびき合いの姿とする。

【単元目標】

- ・我が国の稲作が、自然条件を生かして営まれていることや、その生産にかかわる人々の工夫や努力によって支えられていることを理解するとともに、地図帳や統計などの各種の基礎的資料を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- ・稲作にかかわる人々の働きを多角的に考える力、稲作にかかわる課題を把握して、これからの稲作の発展について考える力、考えたことを説明する力を養う。
- ・我が国の稲作について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して我が国の産業の発展を願い、我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。



農家の方（細金さん）に話を聞いてみたい！⑤

農家の方（志村さん）に話を聞いてみたい！⑨

【工夫】

- ・雪解け水を使っているから、おいしいお米ができる。
- ・機械を使っていることで、作業の効率化を図ることができる。
- ・農業を国が決めた基準の半分にしている。
- ・冬のシーズンに除雪作業を行う。

【課題・困っていること】

- ・農業を継ぐ人がいない。・天気が悪い日が続くととても大変。
- ・お米を食べる人が減っている。→お米が余っている。
- ・台風が来たら何もできない。・水が足りないとお米の品質が下がる

【思い】

- ・多くの人においしいお米を食べてほしい。
- ・消費者にお米を食べて笑顔になってほしい。

【工夫】

- ・品種改良している。・機械を導入して作業を効率よくしている。
- ・農業を使わないことで、健康にもよく、質にこだわっている。

【課題・困っていること】

- ・無農業は手間暇がかかる。
- ・高齢化で継ぐ人がなかなかいない。・お米が余っている。
- ・農地の隣に家があり、トラブルになってしまう。土地がせまい。

【思い】

- ・たくさんの人においしいお米を食べてほしい。
- ・小田原のお米を全国の皆さんに知ってほしい。

農家の方が課題に対して改善しようとしている姿やどんな思いでお米を生産しているかを理解している。【知識・技能】

- ・それぞれのお米はいろいろな工夫をしているんだね。
- ・作り方や工夫が違うから味もあんなに違ったんだね。
- 僕は新潟の細金さんのコシヒカリの方が大量に作っているし、機械もすごかったからいいと思った。
- 私は小田原の志村さんのお米作りの方がおいしさにこだわって作っていると感じたよ。
- どっちもいいと思うけど→→
- どっちのお米作りの方がいいのかな？
- ・どちらの課題も共通して、後継者不足があったね。・
- ・細金さんはたくさんの工夫をしていることが分かった。・細金さんは農業を減らして使っていたね。
- ・志村さんは無農業のために大変だけど頑張っていたね。
- ・すごく大変そうだったな。・農業を使えば志村さんも楽になると思う・・・。
- ・志村さんはどうして無農業で作っているのかな
- ・どうして小田原で米作りをしているのかな。

どっちのお米づくりの方がいいのかな？（本時）⑩⑪

新潟県産コシヒカリ	小田原市産はるみ
【良さ】	【良さ】
→機械を使って大量に生産できる。	→農業を使わず、味にこだわっているところ。
→多くの人に食べてもらえる。	→世界にも認められている。
【課題】	【課題】
・農業は健康被害が出る可能性。	・土地がせまい。・大量に生産できない。・時間がかかってしまう。
・機械の値段が高い。	【課題】
【良さ】	・後継者不足・お米があまり。
→おいしいお米を食べてほしい思い。	

どちらの米づくりがよいかについて考えることで、それぞれのよさや課題を多角的に考え表現している。【思考・表現】

- どちらも良さや課題があることが分かった。
- どちらもおいしいお米を届けたい、食べてほしいという思いがあったね。
- おいしくするためにそれぞれちがった工夫や努力をしているね。
- 共通している課題があることが見えてきた。
- 農家を継ぐ人がいなかったり、お米が余ってしまっていることがあるらしいよ。
- ・この課題を解決していくにはどうすればいいかな？

志村さんはなんで無農業で作っているのかな？⑩⑪（本時）

- ・お客さんの体を大切に思っているからだと思う。
- ・他の品種と差をつけたいからじゃない？
- ・無農業をアピールしていけば売れると思っているから。

志村さんがどうして無農業でお米づくりを続けるのかについて、これまでの学習から考えを持ち、話し合いを通して多角的に自分の考えを深めたり、より明確にしたりすることができる。

【思考・判断・表現】

無農業

- ・やっぱり、無農業を続けることでほかの品種との差が出てくるからいいと思う。
- ・無農業がいつというお客さんもいるから。
- ・無農業ということで小田原のお米が有名になってほしい。

- ・値段が高くなるなら農業を少しは使いたいと思う。
- ・基準を超えていなければいいんじゃないかな？
- ・毎日食べるものだから、安いほうが多くの人に買ってもらえるよ！
- ・大変だと継ぐ人が増えないと思う。

農業

モヤモヤ

・志村さんになんで無農業を続けているか聞いてみたい。

志村さんは大変なのに無農薬で作っているのか聞いてみたい⑫

・お客さんに安心・安全なお米を食べてほしい。
・完全無農薬にして、ほかの品種と差別化して小田原のお米を有名にしたい。
⇒後継者がいないので、お米づくりをした
いという人を増やしたい！

・お客さんのために無農薬を大変だけど続けていたんだね。
・他の品種との違いを生み出したいということが伝わった。
・志村さんのお米に対する思いがよく伝わったね。
・やっぱり課題として、後継者がいないということがあるんだね。
・お米をつくる人がいないから、農地が余っているって言ってたね。
・そういえば、新潟の細金さんもお米農家が減っているって言ってたね。
・この課題を解決していくにはどうしていけばいいのかな？

米づくりの課題をどうやって解決していけばいいのかな？⑬⑭

・お米づくりの魅力をみんなに伝えたいと思う。
・お米新聞を作りたい！
・お米を残さず食べることも大切だね。
・小田原のお米のすごさを家族、学校のみんなに伝えていくのがいいと思う。
・今農家の方が課題に対してどんなことしているか知りたい！

・インターネットで生産の過程をお客さんに公開しているね。⇒安心して食べてもらえるように！
・地域の農家と協力して生産をしている。
・若い人に農業の技術を教えている。
・米づくり体験をしてもらって、興味を持ってもらおうとしているね。
・お米の消費量を増やすために、玄米を使ったパンを作っているね。
・お米農家の方は農業を続けていくために多くの努力をしているんだね。

農家の方が課題に対して改善しようと様々な工夫や努力をしていることを理解している。【知識・技能】

農業にある課題をどうしていけばよいか、これまでの学習や農家の思いから自分の考えをもち、表現している。【思考・判断・表現】

6. 本時について

- (1) 本時目標 志村さんがどうして無農薬でお米を作り続けるのかについて、これまでの学習から考えをもち、話し合いを通して多角的に自分の考えを深めたり、より明確にしたりすることができる。【思・判・表】
- (2) 本時展開

学習活動	主な支援・留意点 ◆評価【観点】
志村さんはなんで無農薬で作っているの？ ・お客さんの体を大切に思っているから。 ・小田原の良い環境を残したいから。 ・無農薬を買いたいという人がいるから。 ・無農薬にすることで安全でおいしいお米をみなさんに食べてほしい。 農薬と無農薬の値段の差が分かるグラフ資料 無農薬 ・無農薬にすることで他の品種と違いを出せる。 ・無農薬を買いたいというお客さんもいるよ ・無農薬にすることで 農薬 ・値段が高くなるなら農薬は少し使っていると思う。 ・毎日食べるものだから安いほうが多くの人に買ってもらえる！ ・大変だと継ぐ人が増えないと思う ・自分だったら少しでも楽に米づくりしたい。 モヤモヤ 志村さんにもう1度聞いてみたい！	○前時までに学習したことを足跡として残し、いつでも振り返れるようにする。 ○子どもの考えを板書に書くとき、仲間分けをしていく。 ○つぶやきを拾い、問い返しをして、わからないまま話し合いが進まないようにする。 ◆志村さんがどうして無農薬でお米づくりを続けるのかについて、これまでの学習から考えを持ち、話し合いを通して多角的に自分の考えを深めたり、より明確にしたりすることができる 【思・判・表】

7 実践を終えて

《ひびき合いについて》

本時では、はじめに「小田原産はるみ」の生産者志村さんは「どうして無農薬で米作りを続けているのだろう」という考えを発表した。これまで学習してきた無農薬のよさや、志村さんのお米づくりに対する思いを踏まえながら「小田原の環境を守りたい。」「安全に消費者に届けたい。」という考えだった。話し合う中でこちらから農薬を基準の半分以下で使っている「新潟県魚沼産コシヒカリ」の値段と、無農薬の「小田原市産はるみ」の値段を提示する。また、平塚市で農薬を使って生産しているはるみの値段も提示し、農薬を使わないことで値段が高くなることが分かるグラフを掲示した。子どもたちはこれまでの学習から、無農薬であると手間暇がかかるため、お米の値段が高くなることを理解していた。そのうえで、その資料を見て志村さんも農薬を使っているのではないかと考える児童も無農薬で米づくりを進めるか、農薬を使って米づくりを進めていくかを話し合うきっかけの資料としてゆさぶりをかけた。その後クラスみんなの考えがわかるように、黒板の上の方に「小田原はるみ・無農薬」、下に「平塚はるみ・農薬」と表示したものを直線でつなげた。米の生産者が減ったり食の多様化が進み米の消費者が減ったりする中で、ノートに根拠を書けた児童からネームプレートを貼った。この時点で全員が同じ土俵に上がり、クラスみんなで友だちの考えを可視化することができた。はじめに直線を中心にネームプレートを貼った児童の考えから話し合いを進めた。次に子どもたちから「平塚はるみ・農薬」という考えを聞いてみたいと発言があり、最後に「小田原・はるみ」に貼った児童の考えの発言を聞いた。今までの調べ学習から得た知識を根拠にして自分の考えを膨らませ話すことで志村さんの思いから考えたり、消費者の思いから考えたりと、多角的な視点をもって農薬について考えることができた。

《ノート指導について》

同じ内容をインターネットで個々に調べたことをスライドにまとめた。その後4人グループで共有し発表した。そうすることで調べた内容を深めることができた。全体共有をした後、学習内容から疑問をもったことをノートに記入し再び全体共有をした上で次の調べ学習に繋げていった。児童によっては稲の絵をノートに描き自分なりにわかりやすいノートを作っている児童が多くなったと感じた。

《成果と課題》

子どもたちの感想、疑問から学習問題を作り、話し合いを進めていったことが解決したい問題になった。毎時間の授業の板書をiPadで写真に収め、それをテレビに映しながら授業を進めた。こうすることで、前時の学習を振り返える手立てとなったと考えられる。最後の授業では、写真の内容を要約したものを模造紙4枚にまとめ、調べ学習の足跡にしたことで価値の違いや生産者、消費者の目線から米作りについて考えをもつことができた。

本時の中でポイントとなる「志村さんはこのまま無農薬を続けていていいのかな？」を学習課題とすることで話し合いはしやすかったと考える。ただ、授業の後半に話し合う時間が少なかったため、はじめの発問を短く切り上げ本題の話し合いを活性化させる必要があった。ペアトークやグループトークの活動を取り入れると安心して発言しやすい雰囲気になり、「小田原・はるみ」の生産者志村さんがどのように米作りをしていけば良いかについて深く考える姿につながったと考える。

